

Title	経済学史研究者としての高橋誠一郎
Sub Title	Seiichiro Takahashi as a historian of the history of economics
Author	飯田, 裕康(lida, Hiroyasu)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.102, No.4 (2010. 1) ,p.637(3)- 654(20)
JaLC DOI	10.14991/001.20100101-0003
Abstract	<p>高橋誠一郎の経済学史研究は、社会問題への関心と、それを解明する彼なりの姿勢のひとつとしての実証主義、すなわち、イデオロギー的先入主を排除しようとする周到な意図のもとに開始されたもので、それは、師の一人であった福田徳三がすでに1900年代初頭にとった方法的意識と相通じるものであったといつてよい。この姿勢は、戦中の1943年の『古版西洋経済書解題』、そして、戦後へと引き継がれた。高橋が英国留学中、研究の場とした「ゴールドスミス図書館」の礎を造ったH. S. Foxwellが、学問論的にA. Marshalに対抗し、歴史主義的な方法の優位を主張したが、高橋もまた経済学研究における歴史主義を貫いたといえよう。</p> <p>Takahashi Seiichiro's research on the history of economics was developed based on his concern for social problems and his positivism toward seeking a way to elucidate these problems in his own fashion, in other words, his meticulous intention to eliminate ideological prejudices from research; it is fair to say that he shared in common with one his teachers, Tokuzou Fukuda, a methodological awareness that the latter had already grasped by the early 1900s.</p> <p>This attitude was apparent in his "Old Version of Western Economic Bibliography," written during the war in 1943, and was succeeded after the war.</p> <p>During his studies in the United Kingdom, Takahashi witnessed H.S. Foxwell, who built the cornerstone of the Goldsmith Library, Takahashi's own place of studies, and who academically opposed A. Marshal and argued for the superiority of a historicist methodology; it may be said that Takahashi also upheld his faith in historicism throughout his economic research.</p>
Notes	小特集：高橋誠一郎の経済学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100101-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

経済学史研究者としての高橋誠一郎

Seiichiro Takahashi as a Historian of the History of Economics

飯田 裕康(Hiroyasu Iida)

高橋誠一郎の経済学史研究は、社会問題への関心と、それを解明する彼なりの姿勢のひとつとしての実証主義、すなわち、イデオロギー的先入主を排除しようとする周到な意図のもとに開始されたもので、それは、師の一人であった福田徳三がすでに 1900 年代初頭にとつた方法的意識と相通じるものであったといつてよい。この姿勢は、戦中の 1943 年の『古版西洋経済書解題』、そして、戦後へと引き継がれた。高橋が英国留学中、研究の場とした「ゴールドスミス図書館」の礎を造った H. S. Foxwell が、学問論的に A. Marshal に対抗し、歴史主義的な方法の優位を主張したが、高橋もまた経済学研究における歴史主義を貫いたといえよう。

Abstract

Takahashi Seiichiro's research on the history of economics was developed based on his concern for social problems and his positivism toward seeking a way to elucidate these problems in his own fashion, in other words, his meticulous intention to eliminate ideological prejudices from research; it is fair to say that he shared in common with one his teachers, Tokuzou Fukuda, a methodological awareness that the latter had already grasped by the early 1900s. This attitude was apparent in his "Old Version of Western Economic Bibliography," written during the war in 1943, and was succeeded after the war. During his studies in the United Kingdom, Takahashi witnessed H.S. Foxwell, who built the cornerstone of the Goldsmith Library, Takahashi's own place of studies, and who academically opposed A. Marshal and argued for the superiority of a historicist methodology; it may be said that Takahashi also upheld his faith in historicism throughout his economic research.

経済学史研究者としての高橋誠一郎

飯 田 裕 康

「わたしは一冊の書籍を買わなかったことをしばしば後悔したのだが、
書物を買って後悔したことはかつてなかった。」

(1)
(Herbert Somerton Foxwell)

要 旨

高橋誠一郎の経済学史研究は、社会問題への関心と、それを解明する彼なりの姿勢のひとつとしての実証主義、すなわち、イデオロギー的先入主を排除しようとする周到な意図のもとに開始されたもので、それは、師の一人であった福田徳三がすでに 1900 年代初頭にとった方法的意識と相通じるものであったといつてよい。この姿勢は、戦中の 1943 年の『古版西洋経済書解題』、そして、戦後へと引き継がれた。高橋が英国留学中、研究の場とした「ゴールドスミス図書館」の礎を造った H. S. Foxwell が、学問論的に A. Marshal に対抗し、歴史主義的な方法の優位を主張したが、高橋もまた経済学研究における歴史主義を貫いたといえよう。

キーワード

経済学における歴史主義、古版本、フォックスウェル、“W. S. Gentleman”，重商主義

はじめに

高橋誠一郎（1884–1982）の 97 年の生涯において、経済学研究は彼の活動の中心的な領野であったことはまちがいないが、彼の果てしない知性の展開のなかにあつては、そのごく一部にすぎないといつて、これも誤りではないように思われる⁽²⁾。誰しも高橋誠一郎が、近代日本の生んだ巨人的知性の担い手の一人であることに異議はあるまい。はじめに断っておかねばならないことは、小稿は、この巨人的知性の全貌を垣間見ようとする試みではなく、そのうちの一部にすぎない彼の経済学研究の、そのまた一部、彼の経済学史研究を取り上げようとするものだけということである。かつて筆

(1) J. M. Keynes, Herbert Somerton Foxwell, *The Economic Journal*, Vol.46, No.184, 1936, p.604. なお、Foxwell については後述。

(2) 筆者にとって、高橋誠一郎先生は直接その警咳に接した恩師の一人であるが、小稿では他の人名表記と同様、敬称は一切もちいないことをお断りしておく。

者は高橋を追悼する一文を『経済学史学会年報』第20号に寄稿する機会を与えられた。以下に、その一部を再録し、筆者の高橋に向きあう基本的姿勢をあきらかにしておきたい。

「故高橋誠一郎先生は、その全生涯を学問・芸術の両道に捧げられた。それは余人が容易に模倣しがたいものであり、まさにそれを表現するに巨人の語が最も相応しい、そうした生涯であった。しかし、それにもまして高橋先生はつねに研究者として、教師として、その一生を終えられたことも忘れてはならない。高齢かつ多忙な公務のなか、最晩年にいたるまで、慶應義塾大学経済学部及び大学院経済学研究科の教壇に立たれ、孫ほども年齢の隔たる若者と接せられ、つねにその端正な語り口を崩さず、淡々と、自己の歩まれた道を語られた。その銜いのなさは、先生の人物描写の妙とともに多くの若者を引きつける魅力に溢れていた。

先生の研究者としての歩みは、慶應義塾、とりわけ福澤諭吉との出会いを欠いて語ることはできないが、それにもまして先生の学問精神に多大の影響を与えたのは福田徳三であった。先生の学問における視野の広さと、分析の厳正さとの共存は、おそらくこの二人の偉大な先達との出会いをとおして形成されたものと推察される。先生は、研究者としての一生を経済学史研究に捧げられたが、それは、先生の追究された壮大な思想に迫る一階梯ではなかったかと思われる。先生が時代の社会科学的問題に深い関心を持たれていたことは、間接的表現ではあれ、先生の学史的諸労作からさえうかがい知ることのできるものである。

言うまでもなく、経済学史研究者としての高橋先生の業績は、今日におけるも巨大である。『経済学史』(日本評論社、1922年)、『経済学前史』(改造社版経済学全集第23巻、1929年)、『重商主義経済学説研究』(改造社、1932年)、『古版西洋経済書解題』(慶應出版社、1943年)等を通じて、先生の経済学史研究の全貌はあきらかであるが、この間、多くの啓蒙的著作をものされ自己の研究成果を一般に知らしめることに多大の努力を払われたことも忘れてはならないだろう。先生の研究は、自ら語られているように、何よりも基本的資料としての経済学文献の蒐集と、それらの厳密な書誌的検討を基礎とするものであった。先生の研究がたんなる文献収集家の域を遥かに超えた、確固とした社会科学的な方法と思想とに裏付けられたものであることは、前掲の諸著を繙読すれば直ちにあきらかである。とりわけ、『重商主義経済学説研究』、とくに初版は、重商主義経済学説、経済思想の全体像を、近代資本主義形成の歴史的転機における「術」としての諸論議の交錯としてみるだけでなく、その時代固有の人間の問題と絡まりつつ展開される様が、中世経済思想、重農主義、古典学派へ、さらには現代への適切な目配りとともにとらえられている。これこそ本書が今日なお重商主義研究における不朽の文献として、まさに古典として重視されるゆえんのものであろう。そしてそこにわれわれは、経済学史研究者としての高橋先生のみならず、思想家としての高橋先生を見るのである。自らの思想を思想として語らなかったところに、先生の社会学者としての謙虚さと矜持とを見るべきであろう。⁽³⁾

なるほど、高橋誠一郎の経済学研究は、これまた広範囲にわたってはいるものの、そのうちにあつて経済学史研究は、彼の経済学研究の道程を敷く羅針儀の役割を果たしているといつてよいように思われる。高橋の全生涯にわたる経済学的営為は、一つにかかつて自立的な学問的ディシプリンとしての経済学史の体系的構築に向けられたものであることは、とくに強調しておきたい。⁽⁴⁾時あたかも、高橋の晩年に相当する時期あたりから、わが国のみならず欧米においても経済学史研究の方法的見直しの議論が盛んになされ、結果として高橋が目指したものは、今や研究上の常識となつていゝるといつても、けつして過言ではない。しかも、その「方法」は今日なお流動的であり、かつ拡散的である。経済学史という、独立したディシプリンの追究は、やむとこゝろがない。⁽⁵⁾このような経済学史研究における近年の動向をもたらした淵源もまた、高橋の時代に発するといつてよい。このことは、見ようによつては経済学史研究が今日ある種の星雲状況にあるということでもあり、いま、高橋をふりかえることはそうした状況の先を見透すためにも、有益なものと思量される。

高橋はわが国における経済学を単純に輸入学問だといつたことはない。高橋（1948）によれば、⁽⁶⁾それどころか彼はわが国近代以前の知的営為のなかに、近代以降の経済学ディシプリン構築へ繋がるものを正当にも認識していた。江戸末期から明治にかけての時期に、高橋の恩師である福澤諭吉自身は、⁽⁷⁾欧米、とくに英語圏の経済学の導入・咀嚼に積極的であつた。それは、例えば、戊辰戦争中のいわゆる「上野戦争」のさなか、福澤が米国からもちかへつて慶應義塾における経済学のテキスト・ブックとしたウェーランド『経済学要論』を殷々たる砲声のなか塾生に講読したエピソードにてらしてもあきらかである。⁽⁸⁾他方、高橋は福澤諭吉の述べた「経済学はその議論の精密なること着々意表に出て、恰も我々に固有なる旧漢学主義の心事を顛覆したり」の句を引いて、欧米経済学導入の積極的な側面を暗に評価しているのである。⁽⁹⁾

(3) 経済学史学会編『経済学史学会年報』第20号、1983年、1ページ。

(4) ここで筆者がもちいる「ディシプリン」とは、せいぜい以下のような意味においてである。
「ディシプリンとは、正確には知的厳格さを浸透させるためのものである。」(Whatmore and Young (2006) p.1.)

(5) 1980年代以降、例えば、*That noble science of politics: a study in nineteenth-century intellectual history* / Stefan Collini, Donald Winch, John Burrow, Cambridge, 1983. などが提唱する intellectual history の方法的インパクトを指摘しうる。これについては、飯田他篇（2006）序文を参照。

(6) 高橋（1948）の最終章、「西洋経済学の日本移植と日本経済学」によれば、わが国への欧米経済学の移植（輸入）はさほど単純な現象ではない。高橋は、江戸期の経済思想が経済思想というよりも政治思想として、むしろ大きな歴史的役割を果たしたと判断し、経済的言説のもつ政治的コンテクストを重視している（高橋（1948）509ページ）。

(7) 高橋が、福澤から直接経済学を学んだかどうかはあきらかではない。高橋が慶應義塾普通部生であつたおりに、最晩年の福澤の早朝の散歩にしばしば同道したことは、高橋（1989）によつてもあきらかである。

(8) ウェーランドの『経済学要論』について、高橋は次のように評している。
「米国ロードアイランド州プロヴィデンスのブラウン大学総長フランシス・ウェーランドの『経

こうした事情にてらしてみると、わが国への西欧経済学の導入は、たんに帝国主義的列強に伍して資本主義の導入・確立を急ぐ国家的意図に発したというよりも、一方にそうした政策的意図の実現をにらみつつ、厳密な理論構成に内在する論理的な理性への、福澤をはじめとするわが国の知識人の飽くなき欲求によったという面があることも無視してはならない。

I 経済学史研究と古版本

history of political economy あるいは history of economic thought としての経済学史ないし経済思想史のディシプリン確立への歩みがいつごろからはじまったのかを論定することは、容易ではない。例えば、かつて、アダム・スミス『国富論』の第4篇はスミスによる経済学史だといわれた時代がある。今日、依然としてこのような了解が存在するとは考えられないが、そうした了解を可能とする言説が『国富論』中に散見されることも否定できない。とくに第4篇に限っていえば、仮にそれがスミスによる経済学史の記述だとしても、きわめて目的意識的な論述であり、今日の観点からしてもそれを独立の研究分野としての経済学史の試みとはとうていなしえない。

経済学史が曲がりなりに独立した分野へ向けて歩みはじめるのは、経済学研究における歴史主義 historicism の台頭を契機とするといつてよいように思われる⁽¹⁰⁾。そこでは、理論史的な、目的論的接近方法よりも、経済史を形成するような人間の経済活動そのものへの歴史主義的接近が、経済学史という副産物を産みだしたのだとさえいいうるであろう。経済の言説史と経済史は、元来離れがたく関連しつつ、それぞれが相互に自立的ディシプリンとして自己主張するなかから経済学史固有のディシプリン構築への歩みがスタートしたのである。

とはいえ、こうした経済学史研究の方向性は、古典経済学自体の論理構造の変化とも密接にかかわっていたと思われる。その理由はいくつかあるが、まず何よりも、1848年に初版が刊行され、以来20世紀前半にいたるまで、イギリス経済学界において揺るぎない影響力をもったジョン・スチュアート・ミル『経済学原理』の存在をあげなくてはならない⁽¹¹⁾。1890年、マーシャルの『経済学原理』

経済学要義』(The Element of Political Economy) は35年間に5万部を売り捌いたと伝えられている通俗書である。英国正統学派の経済理論を基礎として、経済学の要義を平易通俗に表明したにすぎないものである。」(高橋(1956)17ページ。)

(9) 高橋(1956)15ページ。

(10) 高橋と関係の深い重商主義にかかわって、この点を基軸に重商主義の再評価に取り組んだものに、服部正治(2002)がある。経済学の歴史における歴史主義にかかわる際、ドイツとイギリスとを同列に扱うことはできない。確かに、イギリス歴史学派の生成に、W. ロッシャーなどの少なからざる影響は十分検討されるべきであるが、同時に、イギリス古典経済学のパラダイムとしての有効性への疑問ないし「危機」、すなわちイギリス、というかケンブリッジ的、moral science の危機という学問史的な問題を無視することはできない。

(11) あえて筆者の個人的体験を語るなら、1991年、筆者がケンブリッジに滞在したおりに、有名な書肆

が世に問われ、次第にその影響力を増しつつあった時代に、ミルが依然として大きなリファレンスであり続けた理由は何か。

古典経済学の隆盛は、科学理論ないし科学方法論の分野にも大きな影響を及ぼしたが、その背景には二つの要素があったと思われる。一つは、ヒューウェル (W. Whewell 1794–1866) に代表されるいわゆる「道徳科学 moral science」への理論的な再検討であり、いま一つは、古典経済学の体系的硬直化への反発としての、一面ではスミスへの回帰という表象を伴いながらの、歴史主義の台頭であったと見てよいであろう。ミル経済学は、この二つの論点の前者と深いかわりをもって、いわば「最後の道徳科学」という使命を担わされることとなった。

リカードウ、マルサスから J. S. ミルにいたる古典学派の歴史は、その後のイギリス経済学の展開方向に大きく影響するような重要な論点を提起していた。ここには二つの方向性があるものの、両者は互いに絡まりながら、マーシャルの時代までもちこされてゆく⁽¹²⁾。先に見たように、一つは歴史主義的方法の経済学への導入であり、いま一つは、帰納主義的論理と演繹的論理の対峙と見てよいであろう。この対立は部分的にはすでにリカードウとマルサスとの方法的立場のちがいのなかに伏在していたものであるが、それを新たな対立的見地として表面化させるについては、リカードウ以後顕在化してくる資本主義経済のもたらす困難と、それへの対応における資本主義体制そのものへの批判的問題意識の顕在化も、大きく作用していたことはいうをまたない。イギリス経済学史における「方法論争 Methodenstreit」こそは、古典経済学以前の経済思想や経済学説への多大な関心を生み出す incubator の役割を担ったということでもであろう。高橋がわが国において開拓者的に取り組んだ重商主義研究も、こうしたイギリスにおける問題提起に突きうごかされた側面がないわけではない。Coleman (1987) が主題的に取り組んだ economic past への関心の増大は、一つは経済学史の生成と確立に、いま一つは重商主義研究を含む経済学史や経済思想史への関心と、それを实际的に遂行する手段や対象としての過去の経済文献の収集と整理という、経済学研究の新たな分野への関心を生み出すものとなったと見てよいであろう。こうした作業の遂行者の一人に H. S. フォックスウェル (Herbert Somerton Foxwell 1849–1936) がいた。過去の経済文献への関心と蒐集には、すでにマカロックなどの先駆はあったが、徹底した文献蒐集とそれらを基本的に編年的に整理する新たな方法を打ちだしたのは、フォックスウェルであった。

フォックスウェルは、ロンドン大学で BA の学位を取得したのち、1868 年の春学期からケンブリッジの St. John's College に進み、1870 年に Moral Science Tripos に合格、1872 年には、国際

ヘファーズの経済学書売場の平台に当時はやりの米国系の教科書とともに、J. S. ミルの『原理』が平台に山積みされていたのに、驚きを禁じえなかった。

(12) 経済学 Political Economy のディシプリンとしての自立性の問題は、経済学方法論もさることながら、いま一つは大学の教科としての経済学とそれを学んだ者の修業資格の問題もかかわっており、とくにケンブリッジ大学においては経済学優等卒業試験 (Tripos) の導入をめぐる論議と結びついていた。これについては、Keynes (1936)、Koot (1977)、西沢 (2007) 等を参照。

法分野でヒューウェル奨学金を取得している。その後は、ケンブリッジに住みながら、活動の場を主として University College と London School of Economics and Political Science (LSE) に置いた。

ケンブリッジ大学 St. John's College において A. マーシャルの後輩となったフォックスウェルは、自らは将来の経済学 Political Economy 講座担当者の有力な候補となることを希求し、マーシャルをつねに意識する関係にあった。マーシャルがリカード的演繹主義的方法を重視したのに対し、フォックスウェルは帰納主義的方法を重視し、前者の理論経済学、後者の応用経済学への方向性のちがいが明確になる。そしてリカード理論に批判的なジェヴォンズ (W. S. Jevons 1835-1882) の立場に近づきつつ、次第に有力となる歴史主義的方法との調和を重視するにいたる。マーシャルがブリストルの University College 学長に就任すると、フォックスウェルは彼に代わって Political Economy 講座を担当してもいる。しかし、その後フォックスウェルは University College, London のジェヴォンズの後継者となることには成功するが、1908 年、マーシャルがケンブリッジにおける彼の後継者に A. C. ピグーを当てることとなって、フォックスウェルのケンブリッジにおける経済学教授職への望みは絶たれることになった。⁽¹³⁾ フォックスウェルによる古版本蒐集への傾向は、この頃からいっそう強まったといわれる。⁽¹⁴⁾

そもそもフォックスウェルによる経済古版本蒐集は、帰納主義的経済学の展開に必要な、経済的過去にかかわる資料の広範な蒐集・整備という、イギリス経済学界の一方にあった研究上の要請に発するものであった。イギリスにおける歴史主義経済学は、リカード的理論経済学の伝統から離脱し、むしろアダム・スミス再評価への傾斜を強め、いわばアダム・スミスへの回帰という現象をともなったことは先に触れたとおりである。フォックスウェルもまたこうした動向のなかであって、アダム・スミス『国富論』新版 (“Historical Edition”) 編集への強い意欲をもっていた。⁽¹⁵⁾ そのため、『国富論』関連文献資料の精細な書誌学的調査は不可欠と考えたことが、古版本蒐集への動機の一つであったといつてよいであろう。⁽¹⁶⁾ 『国富論』新版は、E. キャナンに先を越され果たすことはできなかったが、文献調査の成果は、のちに、H. ヒッグス (H. Higgs 1864-1940) によって Higgs (1935) として刊行されることになった。⁽¹⁷⁾ 無論、フォックスウェルは自ら書籍蒐集癖があると洩らし

(13) Collet, C.E. (1940) p.554.

(14) *ibid.*, p.554. この間の事情については他に門脇 (2009) をも参照。

(15) Foxwell (1925), p.870.

(16) フォックスウェル自身、このことについて次のように述べている。

「この文献蒐集はそれゆえまず『国富論』の完全なる歴史的バージョンのための資料の収集という目的のもとに始められた。その後、アーノルド・トインビーによる産業革命への特別な関心に促されて、1760-1860 年にわたる時期の資料の収集がなされることとなった。」(Foxwell (1925), p.870.)

(17) Higgs (1935) の刊行について、この企画の元締めの地位にあった W. R. Scott は、General Introduction のなかでつぎのように述べている。

「この書物の編纂は、英国学士院会員、ケンブリッジ大学 St. John's College のフェローである

たとのケインズの報告もあるのだが、⁽¹⁸⁾それだけが無慮 70,000 点を超える古版本の蒐集をなさしめたわけではない。フォックスウェル自身は、このことに関して、1875 年頃、ジェヴォンズの要請に応じて鉄道関連の文献を探索したことがそもそもの始まりだとしている。⁽¹⁹⁾

J. M. ケインズは、Keynes (1936) において、フォックスウェルとマーシャルとの経済学観の大きな相違に注意を促しており、フォックスウェルの経済学観を「経済学は、論理学や数学の一部門ではなく、堆積された経験の全体に健全な推理を適応することによって公共的諸問題を調整する技法の一つである」(ibid.p.593) としている。フォックスウェルの古版本蒐集はまさにこうした彼の経済学観を実現・実践する作業の一部と考えられなくはない。

フォックスウェルによって蒐集された古版本は、1901 年、ゴールドスミス商会（通常、敬意を込めて the Worship Goldsmith Company と呼ばれる）によって買いとられた同商会からロンドン大学に寄贈され、サウス・ケンジントンの Imperial Institute（現ロンドン大学 Imperial College）内に保管され、ここに Goldsmith's Library of Economic Literature の基礎が据えられることとなった。⁽²⁰⁾フォックスウェルによる古版本の蒐集は、その後もゴールドスミス商会の援助をえて続けられ、1936 年、彼の死まで継続された。

高橋は、1911（明治 44）年、慶應義塾から経済原論及び経済学史研究のため留学を命ぜられ、英国に渡った。その時の様子を彼は次のように記録に留めている。

「留学といってもどこの学校にも通わず、主として大英博物館の図書室（現大英図書館 British Library……引用者）や、当時サウス・ケンシントンにあったゴールドスミス図書館で開館から閉館までがんばるのが私の勉強だった。」（高橋（1989）63 ページ）

「冬の夜は、ストーブにへばりつくようにして翻訳（メンガー『国民経済学原理』引用者）の筆を

H.S. フォックスウェル教授による周知の古版本蒐集に基づいている。彼は半世紀以上にわたって、疲れを知らぬ体力と並ぶもののない知識とを、経済古版本、とりわけ 1850 年以前のその見事な蒐集の場を造り上げるために捧げ、多くの稀観書と貴重書とを忘却の淵からすくいあげ、さもなければ失われてしまったであろう他に求めえようのない書物をよみがえらせた。」(Higgs (1935) p.vi.)

(18) Keynes (1936) p.608. ケインズはここでフォックスウェルによる古版本の購入の財政的な面についても触れており、彼がしばしば過大な当座貸越をもって、銀行との間に緊張関係があったともいっている (Keynes (1936) p.604)。

(19) Foxwell (1925) p.870. 「Lardner の *Railway Economy* をジェヴォンズ氏の指示で露天の本屋から買った。ジェヴォンズ氏が述べているように、この本が彼をして著名な数理経済学研究に導いた。」(ibid.) ここにいう Lardner の書物とは、Dionysius Lardner, *Railway economy: a treatise on the new art of transport: its management, prospects & relations, commercial, financial & social: with an exposition of the practical results of the railways in operation in the United Kingdom, on the Continent & in America*, 1850. のことであろう。

(20) 現在は、The Senate House of University of London 内にある。

運んだ。日本におった時分には、図書館へはいつでも、容易にみることのできない古書を、一冊また一冊と買い求めることのできるうれしさは何に例えようもなかった。後年の翻刻本で買えば、わずかな金でえられるものを、とくに高い代価を支払って古版本を求めることは、いかにもばかりしい骨董趣味のように考えられる。しかし、古本あさは、必ずしも、無用の骨董癖からばかりとはいわれない。後年の翻刻本で読むよりも現版を手にした方が、その出版の当時をはるかによく想見することができるような気がするばかりでなく、翻刻本は、校訂者の意見や、無責任な誤写誤植によって無惨に汚損されている場合がけっして少なくない。いろいろな版本を手元に備えることは必ずしも道楽ばかりではない。」(高橋(1989) 63-4 ページ。)

後年、英国の詩人ブランデン(Edmund Charles Blunden 1896-1974)が高橋に語ったように、高橋は英国の最もよき時代に留学し、上の引用に見えるように、当時なお、発展途上にあつたゴルドスミス図書館で古版本に沈潜し、蒐集する機会をえることになった。高橋と、フォックスウェルの間には個人的な接触はなかつたであろうが、高橋が滞在した1910年代初頭のイギリスは、フォックスウェルがFoxwell(1887)において壮大な見通しのもとに記述した経済思想と経済学それ自体のパラダイムの多元化を含む大きな変貌の時に当たっており、そうした面から見れば、けっしてイギリスの最もよき時代ではなかつた。高橋は、イギリスに旅立つまでに培つた自己の社会観・学問観に、古版本の世界をとおしていっそうの確信をもつたといつてよいであろうし、そこにはフォックスウェルの思想に通じるものがあつたと考えられる。⁽²¹⁾

II 高橋誠一郎における歴史主義と古版西洋経済書

『三田学会雑誌』誌上に高橋が経済学史的な論稿を発表したのは、第4巻第3号(1910年)より「雑録」欄に4回にわたつて連載された「シモン、ヅ、シスモンデの生涯」であろう。この論攷が、いかなる経緯で成つたかについて、高橋は明確にはしていない。一見、研究ノートとのように読まれる雑録欄への投稿としては、見事にまとまりのある、筆者自身の主張も盛り込まれたシスモンディ伝となっていることに驚かされる。シスモンディ(Jean Charles Léonard Simonde de Sismondi 1773-1842)における経済学と、政治思想と歴史研究とが一個の統一体をなして彼の思想を形成していることは、この論攷を一貫する高橋の見方であるが、なによりも、個人主義と自由競争社会への批判の企てとしてのシスモンディを取り上げようとの意図は明確である。高橋によれば、

(21) 高橋の学生時代から留学までの時期、彼が労働・社会問題に多大な関心を寄せたことについては、飯田(2007)において言及したが、これと重なるものは、フォックスウェルにもある(Foxwell(1899)参照)。因に、高橋から1年おくれでヨーロッパへ留学した小泉信三は、ロンドンのLSEにおいて、フォックスウェルとE. キヤナンを聴講している(小泉(2001) 318 ページ)。

「彼は当時の経済学説が専ら貨財増殖の方法を講究するに急にして、然も一般社会の幸福を増進すべき該貨財の使用方法を忽諸に附するを遺憾なりと為し、斯る学説に基礎を有する新社会制度は啻に富める者をして弥が上にも富ましむるのみならず、貧なる者をして更に愈よ貧窮ならしめ、益々経済上社会上従属的地位に竜にいたらしむるものであると確信した。」(高橋 (1910a) 333 ページ。)

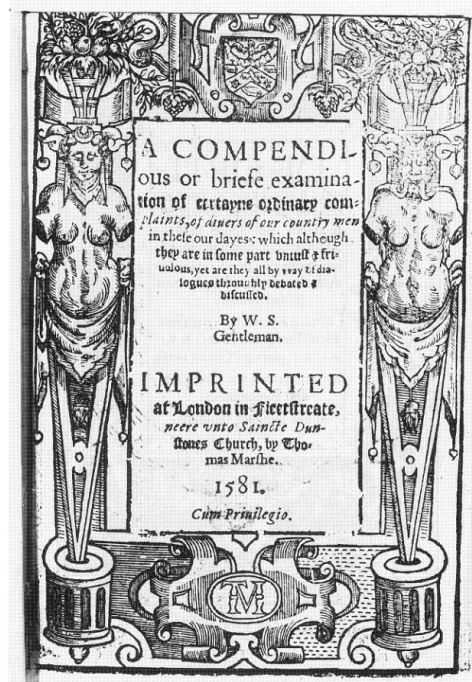
このような認識は、高橋がこの論攷にいたるまでに研究的な関心を寄せた社会的諸問題への姿勢と共通するものであり、この論稿の後に同誌に掲載した「市民的国民経済学と社会主義的経済学との接近 (其一) (其二)」(『三田学会雑誌』第5巻第1号, 第2号, 1911年)とともに、高橋のその後の経済学史ないし経済思想史研究の方法的態度をあきらかにしたものとみなしてよいであろう。

高橋がまとめた経済学史研究書として世に問うたのは1920年、大鑑閣より刊行された『経済学史研究』である。本書は、1000ページを超える大作であるが、その出版の事情について、著者はつぎのように述べている。

「私がいつも失礼をはたらき続けて、何度となくその激怒を買った商大出の福田徳三博士が、或いは同僚阿部秀助助教授を介し、或いは、再三、出版社員を派して、私が『三田学会雑誌』誌上に掲載した浅薄蕪雑な研究を編輯して出版することを勧告された。これは実に意外千万だった。博士は、「君の『三田学会雑誌』に載せたものは、全部切り取って一纏めにしてあるから、それをすぐ印刷に廻せばいい」とまで申された。博士の教を慶應義塾で受けた者の中で、最も多く博士の憎しみを買っているとまで思っているほどで、その知遇を受けているなどは、いささかも考えなかった私は、躊躇に躊躇を重ねながら、ひたすら、博士の意外な厚情を感謝して、大正3年11月から同9年2月にわたって『三田学会雑誌』に掲載したものを纂輯し、大鑑閣から9年10月に刊行した。本文一千二百二十頁の、ただ徒に膨大な『経済学史研究』がこれである。⁽²²⁾

高橋は、本書に先立ち、おそらくは、受講学生の便を図ったのであろう、謄写刷りの『欧州経済学史』を1918年から1920年にかけて大洋社から刊行しているので、著者の経済学史に関する体系的理解はある程度までその輪郭を描きえていたとってよいであろう。「ただ徒に膨大な」という著者の謙遜とは裏腹に、この大著には、その後の高橋の経済学史研究を方向付ける貴重な方法的了解が底流しているといつて過言ではない。そのことは、この著書を契機に、1932年『重商主義経済学説研究』(改造社)刊行にいたる矢継ぎ早な著書刊行があいつぐことから推測しうる。

(22) 高橋 (1989) 154 ページ。



しかし、『経済学史研究』にいたるまでの高橋の研究は、留学とその途次および帰国後の病氣療養が重なり、順調に推移したわけではなかった。『三田学会雑誌』への投稿についてみるかぎり、1911年から1914年にかけて、彼は一編の論稿も投稿していない。健康回復後、1914年「ベルナルド、ダブンツァチの貨幣論（上）」（第8巻第9号）をもって高橋の『三田学会雑誌』への投稿はようやく再開される。その比較的初期の論稿に1581年、匿名氏によって執筆されたパンフレット、“*A compendious or briefe examination of certayne ordinary complaints of deuers of our countrymen in these our dayes: which although they are in some part vnjust and friuous, yet are they all by way of dialogues thoroughly debated and discussed, By W. S., Gentleman/ Thomas Marshe, London, 1581*”がある（上の図は、現在慶應義塾図書館が架蔵する高橋誠一郎旧蔵の本書タイトル・ページである。丸善（1995）、14ページ）。

この小冊子については、高橋は以下述べるような理由から長く関心をもち続け、高橋（1943）にも改めて取り上げられている。この論稿執筆の動機には、いくつかのものが考えられるが、その一つは、『三田学会雑誌』第11巻第4号所載の当該論稿末尾に高橋自身が付記しているように、師である福田徳三の本小冊子への言及に触発されたことであろう。⁽²³⁾ いま一つは、高橋の古版本蒐集そのものからであろう。⁽²⁴⁾ 後者については、後に高橋（1943）に記述されているように、この小冊子の原

(23) 高橋（1917）106ページ。なお、高橋（1943）では、『三田学会雑誌』第16巻第4号に掲載したとしているが、これは著者の勘違いであろう。

本を入手するにいたったのは、1938年である。その経緯について高橋は以下のように述べている。

「吾人は此の書の初版本を入手することは殆ど不可能であると考えて居たのであるが、因らずも、倫敦グレート・ラッセル街六十四番地の古書店ジョージ・ハーディングの一千九百三十八年秋期のカタログ中に本書の存することを知り、即時、電報を以て其の購入を申し込み、昭和十四年十二月十二日に之を受理することが出来た。書肆は此の版本が米国に存すること唯だ一部のみであると称している。今回、余の所蔵に帰せる一本はクランバー文庫 (Clumber Library) より出たるものであって、ニューキャッスル公爵 (Duke of Newcastle) の金色の紋章が其の草表紙の両面に押捺せられてゐる。」(高橋 (1943), 3 ページ。)

したがって、本稿がなされたときに、高橋が手にしえたのは、1581年刊行の *A Discourse of Common Weal of thys Realm of England* の原本ないし Lamond (1893) であったと思われる。とはいえ、高橋がその後この小篇を論ずるときには、つねに *A Compendious or Briefe Examination*……を対象としていることに注意を払わなければならない。

この小冊子については、Lamond (1893) の Introduction に先だって、Lamond (1891) において編集上の問題点についてケンブリッジ大学ガートン学寮のエリザベス・ラモンドによって詳細な検討がなされていた。とりわけ、本小冊子の原稿成立時期と、著者の検討は、その後の本小冊子の経済思想史上の位置づけに関して大きな影響を与えてきた。⁽²⁵⁾高橋 (1915) は、ほぼ Lamond (1893)

(24) 高橋 (1943) 2 ページにはつぎのような記述がある。

「吾人が初めて本書の原版を見ることを得たのは、明治四十四年、倫敦サウス・ケンシントン、インピリアル・インスチテュート内に存する倫敦大学本部図書館付属「ゴールドスミス・カンパニー経済文献図書館」に於いてであった。此の「経済文献図書館」の所蔵本は固とフォックスウェル教授 (H. S. Foxwell) の手に蒐集せられたものであるが、吾人が同図書館に於いて借覽せる本書の余白頁には、此の版本の稀観なること、その購入値段とが記入されて居たことを記憶する。恐らく同教授の筆になれるものであろう。」この観察はケインズの記述とも一致する (keynes (1936) p.604)。

(25) この匿名氏による論稿についての、わが国における研究史は、高橋が伝えているように福田徳三の研究を嚆矢とする。福田はリカードウ地代論の淵源を遡ってアンダーソン (James Anderson) に求め、アンダーソン地代論の背景となったイギリスにおける穀物輸出奨励政策の変遷を論ずる際に、*A Discourse* を William Stafford によるものとし、そのドイツ語訳から引用している (福田 (1906) 49 ページ)。ここで福田がもちいた刊本は、*William Staffords' Drei Gespraech die in der Bevoelkerung verbreiteten Klagen* である。さらに、福田 (1915) では、Lamond (1893) によりつつ、本書を英国経済学黎明期のトマス・モア『ユートピア』に次ぐ重要文献としてあげ、本書の著者・対話の登場人物をめぐる問題点についても言及していた (福田 (1915) 26-7 ページ)。「この書に就いて述ぶることが一再に止まらなかった」(高橋 (1943) 1 ページ) としているように、その後は、高橋 (1917)、高橋 (1920)、高橋 (1932)、高橋 (1943) で言及され、戦後は、出口 (1957) において邦訳されるまでにいたっている。これには、詳細な解題が付され、上記の刊行時期や、著者についての検討も行われている。しかし、高橋の企てについては、研究史的な言及はなく、いささか

によって問題点を検出しようとしている。Lamond (1891) からはじまる検討は、まず 1581 年版の *A Discourse of the Common Weal* の対話編には、二つの原稿が存在することを突き止め、いずれもエリザベス 1 世統治をはるかに遡る時期に執筆されたとの了解を共有している。そこで言及される歴史的事実は、エドワード 6 世の治下の 1540 年代末に生起しており、この原稿を *A Discourse* として「編集」するさいに敢えてエリザベス 1 世に適合的に改変したと考え、このような考えを前提として、原稿の執筆者も、“W. S. Gentleman” とはされているものの、John Hales であろうと推論する。⁽²⁶⁾ 高橋は“W. S.”は著者ではないとの推論を基本的には受け入れるが、著者 J. Hales 説の受容も留保している。この留保は、その後も何ら変更されることなく、高橋 (1943) までもちこされているのである。

高橋による留保には、それなりの理由がないわけではない。というのも、Lamond (1891) と Lamond (1893) とを検討してみると、ラモントが精細に検討したという *A Compendious* の Lambarde 家所蔵の原稿のどこにも John Hales の名前は見出せない。ラモントは、Lamond (1891) においては Lambarde MS のなかに“Jhon []”と読んでいるにすぎないが、⁽²⁷⁾ いかなる理由によるのか、Lamond (1893) 序文中においては、草稿の内容が 1550 年以前の事態にかかわるものとの判断から著者を John Hales としたのである。今日、これが受け入れがたいことは、Lowe (2004) が、Hales は 1549 年に政争のあおりを受けてロンドン塔に収監され、1550 年に釈放されるものの、翌年にはイギリスを離れねばならないような、かなり深刻な個人的状況下を生きねばならなかったことなどをあげており、とうていあの草稿を執筆するような余裕はなかったと考えざるをえないからである。

III 重商主義研究とユニークな経済学史の体系

『経済学史研究』から『古版西洋経済書解題』にいたる壮大な高橋誠一郎経済学史体系の展開と確立の過程は、鋭意努めてきた古版本蒐集の進展もさることながら、蒐集された古版本を、刊行の時間的順序に並べるといような安易なものでなかったことはいまをまたない。そこには、経済学史の基本論点の提示と、方法論的重心、それに展開の展望とが、つねに反省されつつ進行した、特異な知的営為、すなわち、現在に残された過去の堅固な知的構築物に、研ぎ澄まされた知的手段と冷静かつ柔軟な思想をもって対処する高橋固有の知的世界の構築とが、意図されていたといわなければ

適切さを欠いた扱いとなっている。

(26) Lowe (2004) では、Hales の生没年を 1516?–1572 としている。Goldsmiths'- Kress Library of Economic Literature の Online catalogue (<http://microformguides.gale.com>) では 1571 年。また、前ページで言及している *A Discourse of the Common Weal* の著者は、John Hales ではなく、当時貨幣理論家として活躍した Thomas Smith だとしている。ここでも *A Compendious* と *A Discourse* とは区別されていない。

(27) Lamond (1891), p.285.

ならない。そのことは、いうまでもなく『経済学前史』、『重商主義経済学説研究』加えて『古版西洋経済書解題』の3著のタイトルが遺憾なく表示している。これらが世に出た時代は、1920年代後半から1940年代前半に及んであり、わが国の人文・社会科学、とりわけ後者の「危機の時代」といって過言でない状況下で成就されたものであることを想起しなければならない。一見時代の要請に無縁なところで進められてきたような高橋の経済学史研究、そこには時代に立ち向かおうとする高橋固有の姿勢が貫かれていたのであろう。筆者は、そこに時代と闘う高橋の、高橋にかなしえない姿勢を見る。

1920年、先に見たような事情によって、それまでに主として『三田学会雑誌』に発表した論稿をまとめ、『経済学史研究』として刊行した。この浩瀚なモノグラフの集成は、あげて重商主義研究に集中された。ほとんど『三田学会雑誌』に発表したままの文章を収録したといつてよい。

一 マーカンチリズム概論から、十五 フィジオクラートの人々とその時代（この項のみ本書のために書き下ろされたと思われる）まで15点の既発表論文によって構成されるが、一を別にして他はおおよそ時代順に配列されている。無論発表の順序は前後している。冒頭に置かれた「マーカンチリズム概論」で、高橋は重商主義の意義を以下のように規定している。

「吾人はマーカンチリズムを以て、中世的経済組織の崩壊より Physiocrates 及び Adam Smith によりて代表せられたる自由放任の学説が大体において勝利を得るに至る迄の間に於ける欧州諸国の経済思想並に之に適応せる経済政策を意味せんとす。」⁽²⁸⁾

著者がいかに重商主義研究に導かれたのか。この問題は、高橋経済学史のそもそもの淵源を問う重要な課題であることはいうまでもない。前節までにみたように、19世紀後半にしだいに顕在化する経済学研究の多様な方向性のなかに現れる歴史主義的方法は、経済史学という新たなディシプリンにそれが結実したかいななかにかかわりなく、経済学の対象を時代を遡って捉えることの重要性の認識に貢献した。経済学史の面では、Ingram (1893) などがそうしたコンテキストのなかで世に出て、重商主義研究への刺戟となったことは、高橋自身の経験にてらしてもあきらかであろう。また、同じように、Cunningham (1885) がいわゆる近代資本主義の成立期の経済過程に分析の方向を定めたことも、相当な影響を与えていたであろう。これらは、高橋には、大なり小なり福田徳三を通してもたらされたと考えられる。というのも、高橋は、初発から、経済学史ないし経済思想史・社会思想史における実証性という従来の研究には希薄な問題を引き受けていたからである。

高橋のこの最初の重商主義論は確かに論文集的な編集方針をとっているとはいえ、いま一つその後の高橋の仕事を貫く重要な視点が潜んでいる。それは、ひろく moral という言葉で表されている

(28) 高橋 (1920) 1 ページ。

近世・近代初頭に生きた人びとの社会的関係性を問うという視点であろう。高橋（1920）が、まず、トマス・モアの『ユートピア』を取り上げ、冒頭「社会主義を以て労働階級の経済哲学なりと做すの意味に於て吾人は之を純然たる近代的性質のものと観る。」（高橋（1920）31ページ）のも、モアをして原初的な近代社会の関係性への問いかけと見たいが故ではなかろうか。また、*A Compendious or Briefe Examination* に深いこだわりを示し続けたことも、あの小冊子に含まれる近代初頭の人びとの *common weal* としての存在のあり方に、既成の国制を超えて関係性への、はかないものにせよ、ある希望を読み取ろうとしたが故ではなかろうか。だから、ここでは立ち入らないが、経済学史研究の本格的展開の時期に、『私有財産制度論の変遷』（下出書店、1921年）や『協同主義への道』（下出書店、1923年）が世に問われねばならなかったのであろう。

「重商主義研究にとっての記念碑的存在⁽²⁹⁾」とされる高橋（1932）は、これを凌駕するような、構想の壮大さ、資料収集の徹底さ、書誌学的に厳密なテキスト・クリティーク、に貫かれた類書を、今日の経済学史研究の進展にもかかわらずいまだもつにいたっていない。しかし、本書は、初版刊行以来、時代の状況に左右されて再版以降内容の変更を余儀なくされた。初版第6編「社会思想」は、再版ではいっさい削除されてしまった。その理由について高橋はなにも言及していない。第6編「社会思想」は、本書の白眉をなす部分の一つとあってよい。高橋における経済学史ないし経済思想史研究の基本的動機が、高橋（1929）以来あきらかにされているように、古代ギリシャ以来の西欧における社会思想、とりわけユートピア思想または社会改革（改良）思想ないし「人類の社会的状態を改善せんとする創造的思想家」（高橋（1932）861ページ）の解明に置かれていたからである。それは近代への経済社会の発展とそれにたいする「科学的」認識とが、必然的に経過しなければならない歴史的過程の帰結として位置づけられた。それはまた、すでに見たように『経済学史研究』『経済学前史』そして本書を一貫する高橋における歴史理解の根底に置かれたもの、すなわち彼の学問的立脚点そのものにかかわる問題であった。

この第6編の存在は、高橋の重商主義研究をきわめてユニークなものとしていることはいうまでもないが、重商主義に関する今日的な研究状況に、高橋が投げかけ続けている一側面として捉えることもできよう。というのも、近年、重商主義の概念内容がますます不明確となりつつあることを考慮しなければならない研究状況からして、この作品での広範かつ構造的な「重商主義」経済思想の全体像の提示は、重商主義という枠を超えて対象とされている時代の思想像の総体をこそ開示するものと考えられるからである。まさにこのことは「初期資本主義の時代、集権的民族国家発達の⁽³⁰⁾

(29) 小池基之（1982）21ページ。

(30) 卑見を敢えて述べるならば、mercantilism という語によって表示されるような研究対象設定は、今日、その歴史的役割を終えつつあるように思われる。これについては Magnusson（1994）、Hont（2005）などを見よ。

時代における欧州諸国の経済思想並びに経済政策を指称せんとす」(高橋(1932) x ページ) との高橋による規定とよく対応するところでもある。高橋(1929)の緒言が述べるように、思想の時代は歴史的に繰り返すのである。

高橋(1920)から高橋(1932)にかけての時期を『高橋誠一郎 経済学史著作集 第4巻』(創文社, 1994年)巻末の年譜・著作目録によってみると、高橋(1929)の刊行を含むこの時期には、1921年に「基督教と徴利問題」、22年「サー・キリアム・テンプレの経済論」「チャールズ・ダヴェナントの経済策」、25年「人口学説史上に於けるグロートン及びベチィ」「英国に於けるマーカンチリズムの興隆及び衰退」、29年「政治算術と経済学」、30年「マーカンチリズムの重金思想に就いて」、31年「マーカンチリズム時代の人口学説」、32年「マーカンチリズム時代の主権及び財産理論」と、重商主義研究成果の発表は一貫して保持されていながら、その間に、補筆・改訂をほどこされて高橋(1929)に所収された諸論文や古典経済学にかんする諸論文がしだいに多く介在するようになる。

こうした高橋の論稿作成へのつねに進歩を目指して止まない態度は、高橋(1932)がたんなる論文集の域をはるかに超えた、新たな資料収集や考証・分析のいっそうの深化に支えられた体系的成果であることを如実に表している。「自ら満足する日は遂に余の生涯中に来たらざる可きを思ひ、躊躇に躊躇を重ねたる後、茲に前記の旧著並びにその後執筆して三田学会雑誌に登載したる旧講を補綴し」(2ページ)この書は成ったと高橋自らが述べているにもかかわらず、これを以てたんなる「旧稿を補綴し」たものであるとは到底いいがたい。

高橋(1920)が第1論文を「マーカンチリズムの概念」としていたように、高橋(1932)緒言にもこれに対比するべき重商主義に関する理論的総括がなされた。ここからも、この著作がたんなる高橋(1920)の再編集に終わらないものであることはあきらかである。さらにいえば、高橋(1929)が、近代以前の経済学説や経済思想が近代以降に解決を迫るような、容易ならざる課題をあたかも歴史の通奏低音であるかの如く奏で続けたとの高橋の認識も大きく作用していたであろう⁽³¹⁾。したがって、重商主義論も前著の理解に単純に依存することはできなかつたであろう。

この緒言は、恐らくこの書の刊行直前に執筆されたものであろう。というのも、緒言のなかで参照ないし引用されている文献中、マックス・ウェーバー『一般経済史概論』には、1927年刊行の英訳版(Max Weber, *General economic history*, translated by F. Knight, 1927)が使用されているからである。恐らく高橋は本書を早くも1928年中に入手したと思われる。このことと関連して、この緒言で著者は重商主義を広義のそれと狭義のそれとに二分している。先に掲げた規定は、重商主義

(31) 高橋(1929)緒言にはつぎのような記述がある。

「時勢は一直線を成して進むことなく、屢々円線を描きて移動するを見る。洵に歴史は循環す。而も其の円心は又常に移動しつつあるなり。経済思想の流れも、往々にして循環し反復す。而して新たな経済学説が、時代を異にせる過去の其れを継承し祖述するの感あること屢々なり。而も仔細に之を觀れば、斯くの如きものも、過去に存したる思想の単純なる祖述反復には非ずして、其の当時の社会的経済的事情より直接に発生し來たるもの多きを知るなり。」(36ページ。)

にかんする広義の規定であるが、同時に狭義の規定を「吾人は斯くの如きブルジョワ的利害、殊に当時に於ける代表的ブルジョワたる商人階級的利害、並びに特殊商人の関与せる業務上の利害の見地より主張せられたる理論」(5 ページ)としている。こうした重商主義規定の深化は、恐らく高橋における資本主義にかんする歴史的認識の深化そのものを表しているであろう。高橋(1932)の独自性を判断するさいに無視しえないのは、重商主義と統治、経済思想と政治思想とのかかわりが、重商主義を織り上げる糸の一つとして重要な役割を果たしていることである。イギリスにおける絶対王政の崩壊から市民革命を経て、いわゆる「名誉革命体制」と今日総称される政治と経済との統合が達成されるさいの、その過程の担い手を著者・高橋は単純に商人階級(特権的商人資本)にのみ求めているわけではない。「ブルジョワ階級」としてのその担い手の政治的状況と経済的利害とを絡ませつつ、この時期の社会関係の認識に豊かな記述を与えることができたといわねばならない。

IV 結 語

今日からほぼ100年を遡る時期に着手された高橋誠一郎の経済学史研究は、わが国における欧米経済学ないし経済思想の導入史のある重要な側面を担って、今日に受け継がれていると思われる。今日情報処理技術の高橋の時代からは想像を絶する発展のなかにあって、一つの古版本の入手に研究的作業の多くの時間を費やさねばならなかったような状況はない。高橋誠一郎が、その研究資料の多くを求めた英語圏の経済古版本にしても、Online Catalogueによって、またいくつかのDatabaseによって、電子的には、容易に手にすることができるようになった。交通事情の飛躍的改善は、経済学史研究上必要な原典籍に、これも容易く接近しえ、手にすることができる。こうした“device”を利用すること、利用できるための情報を常時更新してゆくことは、経済学史研究者の常識的な務めですらある。とはいえ、高橋が常に心がけたような古典籍への沈潜と、それらの冷静で厳しい読解とが、保証されているわけではない。ラモントの精細な文献批判によらざるをえなかったとはいえ、高橋による *A Compendious or Brief Examination* への「一再ならざる」長年にわたるこだわりを、今日われわれは、無駄な努力とは断じがたい。そう断ずる資格をわれわれは手にしていない。20年余の時間の隔たりを措いて、彼の文章は1937年、社会科学研究への厳しい抑圧的な情勢下にあって、あの小冊子をようやく手にしえた例えようのない喜びを伝えている。高橋誠一郎の、並みの字句をもって表現しがたい職匠としての矜持と、敢えていえば、時勢にたいする抵抗の姿勢とを感ぜざるをえない。高橋の文才をもってすれば、あの時勢やそのもとでの学問状況について、いくらでも人を動かし勇気づける文章は書けたであろう。しかし、彼がなしえたのは「古版西洋経済書解題」の作業であった。これは、高橋(1943)として一本にまとめられたが、まさしく、わが国における経済学史研究の産みだしたまことにユニークな経済学史であった。それは、高橋の研究が徹底した原典主義と、経済学史研究における実証性の追究であったことをものがたっている。

王城山の書齋に端座して古版本を手にする高橋は、恐らくつねに新鮮な気分でそれらに立ち向かったであろう。まさに、『古版西洋経済書解題』（1943年）に収録された一篇一篇の解題が、常套的な手法を脱して、どの一篇もそれぞれ独特な響きを発しているのは、余人をもってしては達しえない境地のなさしむるところだったとしかいいようがない。

(名誉教授)

References

- Bonar, James (1936), H. S. Foxwell, *Journal of the Royal Statistical Society*, Vol.99, No.4.
- Bowley, A. L.(2004), Foxwell, Herbert Somerton, in: *Oxford Dictionary of National Biography*, from its web edition.
- Coleman, D. C.(1987), *History and the economic past*, Oxford.
- Collet, C. E.(1940), Obituary Henry Higgs, *Economic Journal*, Vol.50, No.200.
- Collini, Stefan, Donald Winch, John Burrow(1983), *That noble science of politics: a study in nineteenth-century intellectual history*, Cambridge.
- Cunningham, W.(1885), *The growth of English industry and commerce*, Cambridge.
- Cunningham, W.(1893), Discourse of the common weal of this realm of England by Elizabeth Lamond, *The Economic Journal*, Vol.3, No.12.
- Foxwell, H. S.(1887), The economic movement in England, *The Quarterly Journal of Economics*, Vol.2, No.1.
- Foxwell, H. S.(1899), Introduction to Anton Menger, *The right to the whole produce of labour*, Macmillan.
- Foxwell, H. S.(1925), Economic libraries, Appendix to Higgs, H.(ed.), *Palgrave dictionary of political economy*, New edition, 1925.
- Higgs, H.(ed.)(1935), *Bibliography of Economics 1751-1775*, Cambridge.
- Higgs, H.(1938), Review for bibliography of the collection of banks and tracts on commerce, currency, and poor law (1557 to 1763) formed by Joseph Massie by William A. Shaw, *The English Historical Review*, Vol.53, No.212.
- Hont, I.(2005), *Jealousy of trade: international competition and the nation state in historical perspective*, Cambridge.
- Ingram, J. K.(1893), *A history of political economy*, A & C Black, London.
- Keynes, J. M. (1936), Herbert Somerton Foxwell, *The Economic Journal*, Vol.46, No.184 also do(1971), Essays in biography, *The collected writings of John Maynard Keynes*, ed. by Moggridge, D. E. Vol.10.
- Keynes, J. M.(1940), Obituary Henry Higgs, *Economic Journal*, Vol.50, No.200.
- Koot, G. M.(1977), H. S. Foxwell and English historical economics, *Journal of Economic Issues*, Vol.XI, No.3.
- Koot, G. M.(1987), *English historical economics, 1870-1926*, Cambridge.
- Lamond, Elizabeth(1891), The date and authorship of the 'Examination of Comlains' attributed to William Stafford, *The English Historical Review*, Vol.6, No.22.
- Lamond, E. ed.(1893), *A discourse of the common weal of this realm of England*, First printed

- in 1581 and commonly attributed to W. S.
- Lowe, B.(2004), Hales, John, *Oxford Dictionary of National Biography*, Online version.
- Magnusson, L.(1994), *Mercantilism the shaping of an economic language*, Routledge.
- Whatmore, R. and Young, B. (ed.)(2006), *Palgrave advances in intellectual history*, Palgrave.
- 飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編著(2006)『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社。
- 飯田裕康(2007)「『三田学会雑誌』におけるマルクス」『三田学会雑誌』第100巻第1号。
- 飯田裕康「経済学史研究者としての高橋先生」経済学史学会編『経済学史学会年報』第20号, 1983年。
- 門脇覚(2009)「フォックスウェルとカニンガム——「歴史主義」による内部的抵抗——」平井俊顕編著『市場社会論のケンブリッジ的展開 共有制と多様性』日本経済評論社, 2009年。
- 小池基之(1982)「経済学者としての足跡」『三田評論 追悼 高橋誠一郎』826号。
- 小泉信三(2001)『青年 小泉信三の日記 明治44年～大正3年 東京—ロンドン—ベルリン』慶應義塾大学出版会。
- 高橋誠一郎(1910a～d)「シモンド、ヅ、シスモンヂの生涯(其一)～(其四)」『三田学会雑誌』第4巻第3～6号。
- 高橋誠一郎(1917)「沙翁の著書と誤伝せられたる匿名氏の経済論」『三田学会雑誌』第11巻第4号。
- 高橋誠一郎(1920)『経済学史研究』大鏡閣。
- 高橋誠一郎(1929)『経済学前史 経済学全集第23巻』改造社。
- 高橋誠一郎(1932)『重商主義経済学説研究(初版)』改造社。高橋(1995)II.
- 高橋誠一郎(1943)『古版西洋経済書解題』慶應出版社。高橋(1995)IV.
- 高橋誠一郎(1948)『経済学史略』慶應出版社。
- 高橋誠一郎(1956)『経済学 わが師・わが友』日本評論社。
- 高橋誠一郎(1989)『回想九十年』筑摩書房。
- 高橋誠一郎(1993)『高橋誠一郎経済学史著作集』全4巻, 創文社。
- 竹本洋・大森郁夫編著(2002)『重商主義再考』日本経済評論社。
- 出口勇蔵監修(1957)『近世ヒューマンイズムの経済思想——イギリス絶対主義の一政策体系——』有斐閣。
- 西沢保(2007)『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店。
- 服部正治(2002)「イギリス歴史派経済学における重商主義の復活」竹本・大森(2002)所収。
- 福田徳三(1906)「アンダーソンノ地代論トリカルドノ地代論」『内外論叢』(京都帝国大学)第5巻第4号。
- 福田徳三(1915)「でう`いっど・ひゅーむノ経済学説(一)」『経済論叢』第1巻第1号。
- 丸善株式会社(1995)〔図録〕『高橋誠一郎旧蔵 古版西洋経済書展』。